

第62回全日本教職員バドミントン選手権大会

レフェリー報告



レフェリー 小藏 力

この大会での、宿泊先のホテルでのエピソードである。エレベーターの中、海外旅行をしているであろう若い女性が私の胸にあるREFEREEの文字を見つけ、「REFEREE？」と指をさす。私が、「YES sports BADMINTON REFEREE」と答えると、途端に彼女の眼は輝き「尊敬の念」。ロビー階に着いたエレベーターの中で、私は彼女に「after you」と答える。ニコッと笑い彼女は「THANK YOU」と答える。タクシーを待つ私に熱い眼差しを送る彼女に、ニコッと笑い「アイコンタクト」。ややもすると、英語で答える私の自慢話に聞こえたかもしれないが、それほど海外ではREFEREEと言う役職は「人格者」「裁定を委ねられた者」として尊敬される。

今度、REFEREEシャツが新しくなるが、着る人が研鑽を続けなければブースで売っている赤シャツとなんら変わらないのである。絶えずREFEREEである私は、これからも研鑽し続けることを心に誓う。昨年、全国中体連の大会に集まった「東北審判団」、今年のインハイで集まった「北海道審判団」、そして今回の熱意ある「全国派遣審判団」のみなさんが「真の国際審判団」でなくして何であろうか。海外で開催された試合だけが国際大会ではない。日本で開催された大会に確実に参加し、線審、SJ、主審をやってくださる方々、このような審判員こそ、我が国、日本のバドミントン審判員の技術と地位を向上のためには貴重な存在である。そこで審判員の技術と地位向上のために次のことを提案したい。すなわち、1級の上に、セミプロ、さらにプロフェッショナルのレベルを創設する。オンライン研修を交えてさらに錬磨していき、指定された大会で実践する。このような制度創設を日本協会に切望する。

私と同じ北海道出身で年齢も近いドリカムの吉田美和が歌う「何度でも」。🎵 10000回だめでも…10001回目が来る🎵。今日がその10001回目になることを信じて、赤いシャツに袖を通し、心を整え、「自分と戦う」。そして、毎日、会場へと足を運んだ。インハイ準備、インハイ本番、そしてこの教職員大会と3週間の長丁場である。地元のスタッフも、さぞ疲れていたことだろう。しかし、日本一の競技審判副部長、日本一のアンパイアコーディネータの二人、全国派遣審判員と地元スタッフ、連盟の先生方に支えられながら無事に大会が終えられたことに感謝します。また、派遣審判の中に、「審友」の宮路さんがいてくれたことはとても心強く、安心して大会運営が行うことができました。そばに「日本一のREFEREE」がいてくれたことに感謝。そして、私の家族には、いつも土日は大

会ばかりで、ろくな家族サービスもしない夫、父を許してほしい。

この大会を最後に、日本協会REFEREEを勇退される吉川先生。いろいろと教えていただきました。ゼッケンは4点止めが決まり。2点止めの選手に自前の安全ピンを渡す先生の「やさしさ」。インハイで頑張りすぎた私に、体調を気遣ってフォローしてくれた先生。会場で花束を渡したかったな、と後悔しています。後日、先生には「私の心」を送りました。

18歳で公認審判員の資格を取り、以来42年間、多くの審判員たちと触れ合い確固たる実践に裏打ちされた審判哲学（小藏ワールド）は、「気持ちよくスタートし、試合終了後は、その結果を両者は受け入れ、次のステージに向かってもらう」。それが私の美学である。

ありがとうございました。

【編集部註】審友＝信頼できる、心を通わせる審判仲間。小藏さんの造語。



全国派遣審判団・吉川デピュティレフェリーとともに